

本連載の最後では、カラスとの共存を見据えた根本的なカラス対策を提案したい。

これまで紹介した追い払いや侵入防止などの被害対策は、その場しのぎの対症療法でしかない。根本的にカラスとヒトの間の摩擦を軽減するためには、カラスの個体数を減らす必要がある。その方法として真っ先に思いつくのは、わなや獵銃による捕獲駆除だろう。しかし、カラスは賢く、警戒心が強いため、捕獲すること自体が難しい。

見方を変えて、カラスの個体数が何で決まっているのかを考えてみよう。カラスは

年に3~5個の卵を産み、平均して2~5羽程度が巣立つ。全てのカラスがペアを作つて繁殖し、親と巣立つた子が翌年まで生き延びれば、個

体数は1年間で倍以上にな

る。この調子で毎年倍にな

れば、十数年で日本はカラスに覆われてしまうはずだ

が、そんなことはない。

実は、餌が少ない冬に多く

の個体が餓死するため、個体

数がほぼ一定に抑えられてい

るのだ。言い方を換えれば、

カラスの個体数を決めている

# 広域の市民参加で越冬防ぐ

## ⑥ 根本的な対策

そこで筆者らは「無自覚な餌付けストップキャンペーン」を提案している。カラスの餌が少なくなる冬に、餌資源を徹底的に管理する市民参加型のキャンペーンだ。ゴミをしっかりと管理する、農地

は大変だが、本キャンペーンは1週間のみの実施を想定している。というのも、カラスは代謝が高いにもかかわらず、エネルギーを体内に大量に蓄えていないため、1週間も食べなければ餓死すると考



農地に放置された農作物

えられるからである。なお、空を飛ぶカラスにとって市町村の区分は構い無し。一部の地域だけでキャンペーンを行っても、期間中だけカラスは近隣の別の地域に移動して餌を確保してしまふかもしれない。国や県が主導し、広域で一斉にキャンペーンを実施することが効果的に量をできる限り減らすことができる限り減らすのだ。

これらを一年中実施するのには時間がかかる。一方、被害に遭っている現場では待った無しの状況だ。これまで紹介した「カカシ効果」を利用する対策で対症療法的に被害を防ぎつつ、根本解決のために個体数減少を目的として餌資源を管理することが重要である。

(塚原 直樹 株式会社CrownLab代表)

IIおわり